税理士の ひとりごと

No. 138

アウト老

税理士 齋藤明

「やっぱりみうらしゅんさんのエッセイは最高だ！」って思うのです。それは言葉遊びの絶妙さもさることながら、着眼点が面白い。面白すぎるのです。

以前には、「老いていることを自ら宣言して、自らの老いを笑って受け入れてしまおう」ということで、例えば腰が痛いとか、朝早く目が覚めてしまつて老いを感じた時などに、自らそれを「老いるシヨック！」と笑ってスルーすることを提唱されているのを聞いて、私は思わず「上手い！」と膝を打つてしまったのです。あれから幾年月、老いるシヨック！だったみうらさんはさらに年齢を重ね、また新たな境地にたどり着いたのです。それは、アウト老としての生き方。

まずは見た目について、みうら氏は歳を取つてからは若作りをするのではなく、あえて実年齢よりも老けて見えるような「老け作り（ふけづくり）」をすべしと提唱されます。それは、世の

中の年寄りが皆こぞつて歳を取ると若作りしがちな風潮に対抗するカウntaxーカルチャー（対抗文化）としての、みうら氏のロックンロール魂から発せられた造語なのであります。そのような反骨心を持った老人のことを、みうら氏は「アウトロー」ではなく、「アウト老」とネーミングされました。上手い！上手すぎる！

すっかり感化されてしまった私は、それからみうら氏の対談記事やみうら氏の出演されているYouTubeなどを物色し、ロックンロール魂を抱く老人（ロッケン老）についての造詣を深めていくことになるのです。私の感想では、みうら氏の提唱するアウト老としての生き方は、心理学者のアルフレッド・アドラーが提唱する「課題の分離」という考え方に近く、自分の課題に他人を介入させないようにすることを「良し」とする考え方に類似するものなのではないかと思っています。